

大学院修士課程体験記⑮

佐藤 蓮 (さとう れん) 医学院細胞薬理学教室



私は現在医学院修士課程（医科学コース）に在籍し、細胞薬理学教室で研究を行っています。体験記を執筆するにはまだ早いかもしれませんが、せっかく頂いた機会なので修士課程に進学するまでの経緯、これまでの大学院生活の振り返り、そしてこれからについて

記します。

【修士課程入学以前】

私は、北海道大学教育学部に進学しました。大学入学時、やりたいことは何もありませんでした。無為に過ごしていた学部2年次のある講義で、山仲勇二郎先生と出会いました。入学以降、様々な講義を受けていましたが、山仲先生ほど自分の研究を楽しそうに話してくださる先生はいませんでした。こんなにも人を楽しくさせる「研究」とはどのようなものか気になったと同時に、山仲先生の研究内容に興味を持ったため、学部2年から山仲先生のもとで研究活動に携わらせていただきました。学部3年から始めた卒業研究では、習慣的な運動が概日リズムに与える影響を明らかにしました。この研究成果を学会で発表し、さらに2023年2月に査読付き英語雑誌に論文を掲載できました。これらの経験を通して、研究が好きになりました。また、毎日実験・解析を行い、日々新たな発見のあるルーティンが新鮮で、私の性に合っていました。

研究を続けたいと思った私は、修士課程への進学を決めました。ただ、概日リズムだけでなく様々な研究に興味があり、進学先を選ぶのに苦労しました。多くの選択肢がある中、学部4年の10月に部局横断シンポジウムで乗本裕明先生の発表をお聞きしました。発表内容が自分の興味と一致したため、すぐに面談させていただき、現在の細胞薬理学教室で研究を行わせていただけることになりました。快く送り出してくださった山仲先生、受験を快諾してくださった乗本先生には非常に感謝しています。

【修士1年目の振り返り】

入学以降は怒涛の毎日で、あっという間に入学から1年が経過しました。4月に入ってすぐに電気生理実験の手技修得を始め、夏には*ex vivo*および*in vivo*での神経活動記録ができるようになりました。初めて神経活動を自分で記録できた時の感動は今でも鮮明に覚えています。

また、先生を含むラボメンバーと毎日ディスカッションを行います。動物に電極を留置する手術をしているときや休憩しているときに、現在取り組んでいる研究に関するだけでなく、広くサイエンスに関するディスカッションを行います。これにより、自然と知識や論理的思考力が身につけている気がします。さらに、学部時代に比べ、文章を書く量が圧倒的に増えました。書いた

文章はすべて、先生や先輩に添削していただきました。学部ではあまり学ぶことができない、文章の組み立て方や書き方を丁寧に指導していただきました。これらの能力は、将来どのような環境で働くことになっても役に立つ重要な能力に違いないと思います。私が所属する細胞薬理学教室には、様々なバックグラウンドを持つ個性的なメンバーがたくさんいます。ラボメンバーとの他愛ない日常会話の中にも、これからの人生に活かせるような発見があり、毎日が刺激的でした。修士課程1年目を終え、研究力は大幅に向上し、人生がとても豊かになったと実感しています。

大学院生という研究が忙しすぎて私生活が充実できないと思われがちです（と私は感じています）。もちろんやることはきちんとやらねばなりません、休息も大切です。私は札幌ドームでサッカー観戦や、たまに旅行に行くなどをして息抜きをしています。研究室にもよるかと思いますが、息抜きできないほど忙しいことはないし、息抜きをしないといい研究はできないと思っています。

【今後について】

今後に関しては、私自身が一番わかっていません。私が大学に入学した時に、医学院修士課程に進学するなど毛頭考えていませんでした。今現在は、修士課程修了後は博士課程に進学し、研究を続けたいと思っています。長期的な目標としては、神経科学の世界で、誰かの役に立つ発見をしたいと考えています。

【入学を希望するみなさんへ】

私は教育学部出身で、同期からは医学院への進学は普通でない進路選択だと言われました。確かに文系学部から医学院へ進学する人はあまり多くないかもしれませんが、ですが、意外にも医学院に進学してからは、なぜ教育学部から来たのかは聞かれたことはありません。これ以外の経験からも、北大医学院には、研究に対して熱意を持ち、真摯に取り組む人を歓迎する雰囲気があると感じています。やりたいことが北大医学院にあるのであれば、ぜひ臆せず研究室の門をたたいてみてほしいです。



動物に電極留置手術を行っている様子